

〈書評〉

園田英弘編著『逆欠如の日本生活文化

——日本にあるものは世界にあるか』

I はじめに

従来の日本研究の多くは、西洋社会の歴史的体験をもとに構築された理論を用いて分析が試みられてきた。しかし、西洋と日本とは異なる社会であり、当然のごとくその歴史体験も異なっている。ゆえに、西洋起源の理論では重要となる事象が、日本には存在しないことも珍しくない。そうした西洋的事象の欠如に基づきつつ、かつて展開されたのが、日本の後進性や封建性、あるいは特殊性を強調する諸説であった。しかし一九六〇年代以降の日本経済の高成長と経済大国化は、西洋的事象の欠如に注目する「欠如」論による説明を不可能なら

しめた。だが、日本の経済的成功を説明するべく六〇年代後半以降に登場した多くの日本文化論は、それまで「欠如」論が否定的に評価してきた、後進性や封建性によって生じた日本の特質を、十分な実証に基づくことなく、経済的成功の要因として肯定的に捉え直すという問題点を含んでいた。つまり、否定から肯定へと評価を転換しただけで、日本を特殊なものとなすいびつな日本理解を、そのまま継承し続けたのである。

こうした従来の日本研究の限界を克服すべく、社会学者でありかつ地域研究者でもある本書の編者が、一九九一年^{〔1〕}以来提唱しているのが、逆欠如論である。これは、分

金子 晋 右

析の基準を日本に据えるという点では、従来の日本文化論と視点を共有している。だがこの理論の最も重要な貢献は、一見、日本の固有の文化と思われる事象を、いくつかの構成要素に分解することによって、諸外国における近似の事象と比較検討することを可能にした点にある。これにより、比較文化論や比較社会学等の研究者は、日本文化論の一国的閉鎖性を克服し、日本で見られる事象を肯定的、客観的、相対的に理解するための、一つの貴重な方法論を入手したと言えることがきよう。

II 概要とコメント

本書では、この逆欠如論の手法を用い、

総勢十四名の研究者が、近現代の日本の生活文化についての検討を行っている。構成は、以下の通りである。

総論―生活文化比較の座標軸（園田英弘）

第I部 近代のインパクト

華族は貴族か 底辺の華族たち（浅見雅男）

日本建設産業の特質―公共工事市場参入システムを中心に（高橋伸子）

「歌俳」欄は世界にあるか―新聞に見る「日本」の固有性（佐田智子）

水虫―近現代日本の栄光とその痕跡（眞嶋亜有）

第II部 経済成長と生活変容

魚肉ソーセージと日本の肉食文化

（原田信男）

日本蹴球文化の変遷（バルト・ガーンズ）

世界の名門女子大問題（嘉本伊都子）

「連れ残業」と「天下り」―日本の

職場文化と日本経済の競争力（引馬

滋）

多品種化する日本の清涼飲料水

―日本企業の戦略と日本人の生活の

観点から（赤岡仁之）

第III部 現代と娯楽文化

世界に忘年会はあるか（園田英弘）

芸者とホステスと日本と（井上章

一）

バレンタインデーの不易流行（佐藤

友美子）

ブランド志向の比較考現学―「ル

イ・ヴィトン現象」考（苑田知江）

世界に花見はあるか―逆欠如のなか

の日本文化（白幡洋三郎）

紙幅の関係上、評者の問題関心に基づき、

興味を惹かれた論文のみを取り上げること

をお許し願いたい。

冒頭に置かれた総論では、逆欠如論につ

いての編者による説明が行われている。第

I部では、佐田論文が最も秀逸であった。

同論文によれば、新聞に「歌俳」欄（短歌

や俳句などの読者投稿欄）があるのは、実

は日本だけの特徴である。欧米の新聞では、

詩の欄がないだけではなく、フランス以外

では小説も文芸評論も掲載されないと云う。

海外の新聞で唯一の例外はアラブ圏であり、

読者意見欄に、主として政治的な主張を持

った詩が掲載される。その理由は、「詩人

こそが部族の魂であり、代弁者であり、宣

伝者であり、記録者であった」（六八頁）、

からである。こうした海外との比較から、

朝日新聞をはじめとした日本の主要紙の紙

面を分析すると、新聞の一面や代表的なコ

ラムにも俳句や歌が多用されていることが

注目される。この事象は日本の新聞の強い

情緒性を表すと同時に、新聞が読者の情緒

の代弁者となつてゐることを意味する。新

聞の読者である知識人層の間に、論理重視

の欧米対、情緒重視の日本・アラブ、とい

う構図があることを浮き彫りにした同論文

は、極めて優れた比較文化論と言えよう。

眞嶋論文は、水虫自体は世界中にあるに

もかわらず、水虫が国民病化しているの

が日本だけであることに注目し、逆欠如論

を用いてその理由を明らかにした点が見

事である。同論文によると、日本の畳や洋室の絨毯は、実は水虫の正体である白癬菌の培養地となっている。日本の住居文化では家に上がる際には靴を脱ぐが、それにより多くの大衆の足裏に白癬菌が繰り返し感染してしまう。しかも高度成長期以降はサラリーマン層に革靴とナイロン靴下を履く習慣が普及したため、感染した白癬菌が悪化して深刻な水虫になってしまったのである。海外ではすぐに完治する水虫が、日本のみで完治しないのは、菌の種類が異なるわけではなく、日本独特の住居文化により繰り返し菌に感染していたからだったのだ。なお、高度成長期に水虫が急速に蔓延した理由には、多汗を助長するナイロン靴下の普及以外にも、サラリーマンの長時間労働とそれに伴う靴・靴下の長時間装着も挙げられるのではないか。その点の指摘がなかったのが、唯一の残念な点である。

第II部では、原田論文が秀逸である。同論文は、肉類への抵抗が根強かった魚食文化である日本において、肉食文化が普及する下準備をしたのが、伝統的なカマボコ製

造技術によって生み出された魚肉ソーセージであったことを明らかにした。真正ソーセージの下級代替財としての魚肉ソーセージの役割は既に終わってはいるものの、魚肉ソーセージ(及びハム)は高級化すると共に、真正ソーセージよりも健康に良い点を武器に、新たな市場を開拓し始めていると言う。肉類の消費が増加した今日でも、日本における魚食文化はまだまだ根強いのだろう。現代食文化の研究者にとって、必読の論文である。

引馬論文は、日本企業におけるサービス残業を「連れ残業」と捉え直し、大部屋で共同作業をする中で、同僚への気配りや手助けの結果として生じている、と見なした点が斬新である。日本企業の強い競争力は、大部屋で働く社員が問題意識と情報を共有化し、さらにお互いが助け合うことによって生み出されたものだったのである。なお、高級官僚の天下りを肯定した部分については、感情が先走っているように見受けられ、充分な説得力は感じられなかった。官僚の天下りを、民間企業における親会社から子

会社への出向と同一視しているが、公共選択論的視点では全く別の現象である。官僚の民間企業への天下りや接待漬けは、やはりレント・シーキング^③の概念で分析する必要性がある。

第III部は、苑田論文を除いた全てが、人間関係の構築に関わる事象について検討した論考である。園田論文によると、江戸時代までの忘年会は現状の人間関係の維持を目的としていたが、身分制度が廃止された明治以降の近代忘年会は、新たな人間関係の開拓を目的とした。経済成長に伴い労働人口の多くがサラリーマン化した戦後になると、企業の社内行事として普及した忘年会は、大衆忘年会と呼び得るものとなった。企業が経費の一部を負担する企業忘年会は、一九七〇年代までは、企業内部の階層秩序と、平等主義を内に秘めた無礼講とが見事に両立しており、ゲゼルシャフトとゲマインシャフトが融合した日本型企業共同体を維持・強化する効果があった。さらに同論文によると、近年において日本企業が多国籍化して世界へと拡大するのに伴い、企業

忘年会もまた世界へと拡大している。しかもその国の伝統や風習を受け入れて柔軟に変容することによって、日本人社員と現地人社員との間の人間関係の強化に、大きな役割を果たしている。忘年会という斬新な視点から日本企業の本質に鋭く切り込んだ手法は、敬服に値しよう。

忘年会の分析が、その性格上、主として男性間の人間関係に焦点が絞られたのに対し、男女間の人間関係に視線を向けたのが井上論文である。芸者やホステスは娼婦ではないが、かと言って良家の子女というわけでもない。言わばその両者の間のグレーゾーンに位置する職業である。しかし芸者に関しては、時代と共に生活様式の西洋化が進んだ結果、芸者あそびも衰退したが、逆にそれによって芸者の芸能者としての地位が強化された。そして現在では、芸者は和風文化と伝統芸能の貴重な継承者として、自らを位置付けるようになっていく。つまり、豊かな芸術文化は、女性を聖女と悪女（娼婦）とに二極分化して把握する傾向の強い社会では生じ得ないことを、同論文は

示唆している。評者の私見によれば、逆欠如論を用いて日本の芸者と芸術文化との関係を基準に西洋を見ても、同様のことが言える。西洋で最も豊かな芸術文化の花開いたフランスでは、近代に至るまで女性の財産相続権が存在せず、その上ドイツのような長男による事実上の老母養老義務もなかったため、夫に先立たれたフランス女性は、自らの生活のために常に恋愛をして扶養能力のある男性を確保し続けなければならなかった。つまりフランス女性は、社会制度上の欠陥により貞操堅固な聖女であることができず、生来的に娼婦的行動を取らざるを得なかったのである^③。しかしそれによりフランスの芸術文化は、ドイツや、女性が財産相続権を有する英国よりも、華やかなものになったのだと言えよう。また、『恋愛と贅沢と資本主義』を著したゾンバルト^④によれば、フランス人富裕層の間における奔放な恋愛と、それによって生じた愛人に貢ぐための贅沢品の過度の消費こそが、フランスの近代化と工業化をドイツに先んじせしめた理由の一つである。こうしたゾン

バルト・テーゼをも視野に含めれば、男女間の人間関係に光を当てた井上論文の意義は実に大きい。

白幡論文は、花見を「群桜」「飲食」「群衆」の三つの構成要素に分解して把握し、国内外の事象と比較検討したものである。もともと日本の花見は、宮廷行事としての花見と、水田稲作民による農耕儀礼としての花見とが融合したものである。そのため海外では、草花の観賞と集団での飲食は共存することがなく、国内でも王朝と農耕形態の異なる沖縄では花見を確認できない。だが近年では、ブラジルにおいて、日系人を中心に花見が開催されており、しかもその花見には、非日系人も数多く自発的に参加するようになってきている。つまり、古代日本の花見は農耕儀礼であるがゆえに、閉鎖的な農村共同体内における人間関係を維持・強化する点に特徴があった。しかしブラジルの花見はそれとは逆に、全ての民族や異文化集団を受け入れる開放的な人間関係の構築に、大きく貢献しているのである。閉鎖的だと思われがちな日本の社会や

人間関係に、花見という視点から接近することにより開放性を見出した点は、まさに慧眼である。

佐藤論文は、バレンタインデーから人間関係を観察したものである。西洋起源であるバレンタインデーは世界各国で確認できるが、女性が男性にプレゼントを贈るのは、日本と、その影響を強く受けた韓国だけの特徴である。また、義理チョコがあるのも、日本特有の事象である。その理由は、歳暮や中元などの従来の贈答文化は男性が主体であったため、企業内で増加した女性社員は、社内における人間関係を強化するのに利用できる、新たな贈答儀式を必要としていた。企業内を中心に義理チョコが八〇年代に普及したのは、そうした女性社員のニーズにバレンタインデーが適合したからであった。近年では「友チョコ」なるものが生まれ、女性間でのチョコの交換が頻繁に行われるようになってきたのも、さらには、家庭内で母と娘がチョコレートを手作りするようにってきたのも、女性がバレンタインデーを積極的に人間関係の強化に利用

しているからである。なお、同論文は指摘していないが、近年における社内義理チョコの減少は、女性の正社員が減少し、派遣社員やアルバイトが増加したからではないか。

苑田論文によると、ルイ・ヴィトンの全世界での売り上げの三分の一は日本支社によるものであり、なんと、三千万人もの日本人がルイ・ヴィトンを持っているとのことである。そうした大量需要が発生している要因は、ファッション支出額に関して上・中・下の三層に細分化した場合、中層女性が自らのステータス・シンボルとしてルイ・ヴィトンのバッグを身につけているからである。同論文は、女性若年層のファッション傾向をエレガンス派と、ジーパンを主体としたカジュアル派とに細分化しているが、ここで目を引くのは、カジュアル派中層女性は、ヴィトンのバッグは「どんな服装にも合う」と考え、「ジーパンに合わせ」ている点である(三七〇頁)。しかし本来西洋では、ルイ・ヴィトンのバッグは上流階級の年配婦人が好むものなのであ

る。だが日本では、元来アメリカの労働者や農民の労働着であったジーパンと、欧州の上流階級が持つヴィトンのバッグとを同時に身につけても、それに違和感を感じて非難するのは、ごく少数の「パリの常識を持つ日本人」のみである(三七八頁)。異文化間の交易において、特定の物産の持つ文化的意味を、購入側が自由に剝奪し、新たな文化的意味を付与する事象は、文化人類学的見地からは、そう珍しいものではあるまい。経済史研究においても、近代の欧州—アジア間の貿易について、同様の事象が見て取れる^⑤。だが、先進国どうしである現代の日本と欧州の間に同様の事象を見出したことは大変興味深いことであり、同論文の大きな貢献であると言える。

本書は第一級の日本研究者が集結しただけあり、各論文はみな読み応えのあるものであった。上記で触れなかった浅見論文、高橋論文、ガーンズ論文、嘉本論文、赤岡論文も、それぞれ社会史、産業史、文化史、社会学、経営学の論考として優れたものであった。ただ惜しむらくは、必ずしも逆欠

如論の手法を充分に生かされていい論

文も、一部にはあったことである。例えば、日本の女子大が目指すべき理想像がアメリカや韓国の女子大であると見なす嘉本論文は、旧来の欠如論を克服しているとはいえない。そもそも大学には、就職予備校と結婚予備校以外の役割もあるはずである。人格の向上の場としての役割が、それである。とりわけ、集団行動と、それゆえに集団内での良好な人間関係の構築を重視する日本の社会では、名門大や伝統大の校風によって養成される人格者の方が、高度な職務能力を持つ帰国子女に比べて、民間企業からの需要も遥かに多く、社会的な評価も高い⁽⁶⁾。逆欠如論の視点をより一層徹底するのが、今後の課題であろう。

とは言え、多様なテーマに対し、逆欠如論という新たな手法が極めて大きな効果をもち得ることを本書が実証したのは、確かである。西洋起源の理論の応用から脱皮し、地域研究に新たな境地を開いた本書は、比較文化論者や比較社会学者のみならず、全ての社会科学研究者の必読の書であること

は間違いあるまい。

注

(1) 園田英弘「逆欠如理論」『教育社会学研究』一九九一年、四十九号。

(2) 政府が経済活動に規制を加える時、企業はその規制から逃れるため、もしくはその規制を自社に有利な形で適用してもらうために、規制者である政治家や官僚に対し、接待などの利益を供与する。レント・シーキングとは、そうした企業の行動を指す(詳しくは、デニスC・ミュラー著、加藤寛監訳『公共選択論』有斐閣、一九九三年、二二八―二四五頁。ロバート・トリソン、ロジャー・コングレン編、加藤寛監訳『レントシーキングの経済理論』勁草書房、二〇〇二年、など)。したがって、天下りの受け入れも、利益供与の一形態である。

(3) 離婚制度の創設や、夫の妻に対する懲戒権(修道院監置など)の廃止などにより、近代的な側面を有するとされるナポレオン法典においても、財産権に関しては妻の側が著しく不利であった。なぜなら、夫の固

有財産(婚姻前に取得、もしくは婚姻中に相続・贈与された不動産)については、血族主義の観点から妻の相続権が否定されたのに対し、夫婦の共通財産(妻の持参金を含む全ての動産)については、女性が法的に無能力とされたため(ただし例外規定有り)、夫が管理・処分権を有していたからである(稲本洋之助「フランス近代の家族と法」家族史研究編集委員会編『家族史研究第五集』大月書店、一九八二年)。そのため庶民層では、なけなしの夫婦の共通財産の全てを夫が愛人に貢いだために、路頭に迷う妻も少なくなかった(詳しくは、ジャンポール・アロン編、片岡幸彦監訳『路地裏の女性史―十九世紀フランス女性の栄光と悲惨』新評論、一九八四年、など)。もっとも、フランスの南部は北部とは異なり、ドイツのように息子が親と同居することが多かったため、事実上の老母養老義務があったと言える。欧州の家族構造について、詳しくは、E・トッド著、岩崎晴己訳『新ヨーロッパ大全』第I巻、第II巻、藤原書店、一九九二、一九九三年。

(4) ヴェルナー・ゾンバルト著、金森誠也

訳『恋愛と贅沢と資本主義』講談社、二〇〇〇年、などを参照。なお、ドイツ語の初版は一九一二年。

(5) 川勝平太『日本文明と近代西洋』日本放送出版協会、一九九一年、など。

(6) 経済機構において、西欧は職能面を優先する「職能制」の組織であるのに対し、日本では人格面が優先される「人格制」の組織である(梅棹忠夫『近代世界における日本文明—比較文明学序説』中央公論新社、二〇〇〇年、一〇三—一〇四頁)。